

ミルトン・フリードマン：業績と日本への教訓

一橋大学 清水啓典

昨年 11 月 16 日、94 才でその生涯を終えたミルトン・フリードマンは、人類史上で最も偉大な経済学者の 1 人であり、とりわけ 20 世紀においては異論の余地なく最も影響力を持った経済学者であった。その人生を通じてフリードマンは、世界経済や政策のあるべき姿を理論的・実証的に示して、世界中の人々を説得しつつ現実に関国の政策を変更させ、世界をより自由で豊かな時代に導くという仕事を成し遂げたからである。経済学がこれほどまでに世界を変える力を持っていることを、彼ほど模範的に示した人はいない。事実、過去 50 年間の主要な経済政策で、彼が影響力を及ぼさなかった問題はほとんどないと言ってよい。

ここで、彼の経済学上の業績について述べる必要はないであろう。それ以上に注目すべき点は、自由の重要性を世界的に認識させて世界政治の動向を変えたその信念と行動力である。彼の思想や業績が背景となって、世界では旧社会主義諸国の市場経済化、レーガン・サッチャー政権による米英の規制緩和と小さな政府、中国・インドやロシア・南米等 BRICs 諸国の自由化政策と成長、世界からのインフレーションの事実上の消滅、グローバリゼーション等々、世界経済が革命的な変化を遂げ成長を続けている。

本報告の課題は、その中で一人日本だけが国家レベルの構造改革に遅れて、世界最悪の財政状況でなお停滞とデフレ脱却に悩まされているという事実である。ケインズ理論の影響が強かった日本は、フリードマンの経済政策への影響が世界中で最も小さい国の一つである。なぜ、日本では彼の影響が小さかったのか。成長促進のため、日本は何をどのように変えるべきなのか。この問題を世界の諸国との比較の中で検討することが本報告の目的である。

結論の要点は次の通りである。1. 赤字財政支出の景気拡大（乗数）効果が働かないという認識が日本では欠如していたこと。その理由は、A. 理論が持つ現実へのインプリケーションの理解が不足していたこと。B. 抽象的理論研究が中心で、その妥当性を検証する実証研究が不十分であったこと。C. 政策当局側の新しい理論を実践する姿勢の欠如。これは政治家にマクロ経済理論の理解が欠如していたことの反映であり、経済学者の責任でもある。また、2. 日本に必要な構造改革とは何かを検討し、日本の構造改革は小さな政府に向けた動きと、金融市場改革が大きな課題であることを示す。

なぜ、そうなのか、について、いくつかの例とデータを示しつつ、フリードマンの遺産を有効に活用して、日本の構造改革を進め再び成長力を回復するための政策に関する私見を述べることにしたい。

参考文献：清水啓典「追悼ミルトン・フリードマンー世界を変えた経済学者」、『経済セミナー』、2007 年 2/3 月号